

宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」第4回研究会
幡鎌一弘

2010年1月23日（土）宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」第4回を行ない、お二人に報告をいただいた。

武井順介氏（立正大学人文科学研究所）「断片化される教祖像—世界救世教いづのめ教団信者の体験談を手がかりとして—」では、ライフヒストリー研究の方法論に学び、マスター・ナラティブ（全体社会の支配的文化で語られているストーリー）とモデル・ストーリー（ある一定のコミュニティの中で機能するストーリー）の関係性の变化を通して、教祖像と体験談の関係を世界救世教いづのめ教団を対象に分析しようと試みた。

ついで、遠藤潤（國學院大學）「平田篤胤と気吹舎—教祖論・開祖論からみた「大人（うし）」と門人組織—」は、気吹舎の出した「御一代略記」を平田教団の教祖伝と小林健三氏は位置づけたが、果たして平田派の組織は教団として理解できるのだろうか。そもそも篤胤はどのような信仰的・宗教的要素を帯びていたのだろうかという問いかけから出発し、気吹舎のその後の動向を本教教会の成立にいたるものとして分析した。篤胤没後から神格化ははじまっていた。しかし、明治維新の一時期、神道国教化政策の中で自らの存在を主張しながら、その挫折のなかで「四大人」を学神として祀り教団化しようとしたことが、教団の歩みに影を落とした。

以上のような概略のもと、方法論的な問題もふくめて討論が

行なわれた。神道のしかも教団として成立したとはいいがたい気吹舎の平田篤胤が含まれたことで、「教祖」とは何か、という問題がクローズアップされてきた。今回の研究会で、日蓮・親鸞・中山みき・赤沢文治など、教祖・開祖としての位置づけが明確な人が扱われたときには、教祖とは何かを問う必要はなかった。平田篤胤を教祖とするのは一般的ではないが、気吹舎の後継者たちは篤胤をそのように慕ったこともあり、その著作が聖典として扱われた一面も見落とせない。教祖伝（像）とその後の教団のあり方が関係して未発の教祖に終わったのかもしれないと考え、先にあげた教祖・開祖の輪郭は、最初からそのように明示的だったのかということが問い返されると思われる。

ついで、教祖伝の読みの共同体をどのように理解するのかも大きな問題点となるだろう。いづのめ教団では教祖伝はさして読まれないのである。教祖と人々が接したときの記憶は、教祖の人生のなかのごく一部（断片）でしかなく、それを教団が集成して「教祖伝」というトータルなものとして提示する。しかし、読み手は再びそれを断片化して利用するといった教祖伝の生成と受容のありかたが示唆的であった。教祖伝（全体像）を作るということは、教祖に接した体験とも教祖を思う宗教体験とも次元の異なる作業なのである。完全なものとしては存在し得ない教祖伝の正統性を担保するものとして、教団あるいはアカデミズムがあるということも深めていくべき問題だろう。

第224回研究報告会

コンゴ伝道現状報告（1月18日）

森 洋明

1990年代の3度にわたる内戦の中で、コンゴブラザビル教会は壊滅的な被害を受けた。しかし、2000年以降からの教会復興の中で新たな活動が展開し、特に2003年にバゼビバカ・ピエール5代会長が就任して以来、現地の社会の必要性に応じる形で、さまざまな活動が展開されるようになった。この報告会では、これらの教会活動の現状を報告するとともに、それらの問題点や課題、また将来の展望についてなどをまとめた。

最初に現在の教勢（布教所2カ所、講社10カ所）を写真や映像で紹介し、次に教会や布教所等で展開されているさまざまな活動についての報告を行った。教会活動としては、にをいかけ・おたすけはいうまでもないが、文化活動（コーラス隊、CD作成、コンサート、日本語教室、文化センターなど）や教化育成プログラム（教義研修会など）が行われている。少年会の活動としては、鼓笛隊やコーラス隊、子どもの祭りなどがある。また「青年の集い」が中心となって、遠隔地への布教や識字教室、音楽隊などが積極的に行われている。

さらに、これらの活動を資金面でサポートするための活動（パーキング、養魚など）も展開され、それは同時に地域に対する雇用にも繋がっている。そして、教会を挙げて取り組んでいる活動として「天理教総合教育施設」があり、現在のところ託児所から小学校までの学校を運営し、約500名の児童

を預かっている。公立学校のエデュケーション環境が劣悪な中で、教育に対する教会の取り組みは、大きな社会貢献として受け入れられている。

最後に、これらの活動の意義、とりわけコンゴ社会に貢献する教会のあり方を再確認し、これからの課題、今後の展望についても議論した。



教義研修会の講義



少年会によるおつとめまなび



養魚用の池



天理教総合教育施設

中欧（チェコ、ハンガリー、ポーランド）環境調査報告

佐藤孝則

2010年1月30日から2月6日にかけて、中央ヨーロッパ3カ国（チェコ、ハンガリー、ポーランド）の河川、公共交通など環境保全に関する実態調査、及びハンガリーで1980年代に起きたダム建設反対運動とチェコにおける温暖化対策や環境NGO活動サポート事業などの聞き取り調査をおこなった。

1. 都市部の主要河川

チェコの首都・プラハの市街地を流れるヴルタヴァ川は、南ボヘミアから北ボヘミアへ北流し、ドイツのドレスデンを経て北海に注ぐ美しい川である。また、この川はチェコと旧東ドイツ、ポーランドの3カ国を囲む「黒い三角地帯」を貫いている。この三角地帯は、1989年に「ベルリンの壁」が崩壊するまで、旧ソ連を頂点とする社会主義諸国のなかでは最も公害が著しい地域だった。日本の公害発生地域に勝るとも劣らないほどの大きな被害が出ていた地域である。



1980年代まで公害被害が著しかった「黒い三角地帯」。



プラハ市街を流れるヴルタヴァ川。

ポーランドの首都ワルシャワの市街地を流れるヴィスワ川は北流するとすぐに西流し、再び北流して北部の湖沼地帯を経て最後にバルト海に注ぐ、ポーランドの主要河川の一つである。このヴィスワ川流域にはシレジア鉱工業地帯があり、1980年代まで未処理の廃水がこの川に流れ込んだことがあった。また、主要河川の一つオドラ川も、旧チェコスロヴァキアから流れ込んでくる時点で既に汚染が進み、ポーランドへ入ってもさらに亜鉛、カドミウム、鉛、水銀といった重金属汚染が加速されたため、河川の汚染は最悪な状況だった。

ポーランドの水質汚染は、社会主義政権が崩壊するまで深刻な状況にあった。1964年時点で「水道に使用可能」な水は全体の32%を占めていたが、社会主義政権崩壊後の1996年に

なっても水質悪化は止まらず、4.8%にまで低下していた。さらに同国を流れる全河川のおよそ3分の2の水質が、「水道に使用可能」や「農業に使用可能」なレベルよりも低い、「工業用水に使用可能」あるいは「工業用水としても使用不可能」という状況だったという。すなわち、ポーランドでは「水道に使用可能」な水は今から15年ほど前の段階でも5%程度しかなかったということである。これは飲料水の確保もままならない最悪の状況にあったことを示している。



川面の多くが凍結するワルシャワのヴィスワ川。



ブダペスト市街を流れるドナウ川。

ハンガリーの首都ブダペストの市街地を流れるドナウ（ハンガリー語ではドゥナ）川はドイツのシュヴァルツヴァルトの森を源流とし、オーストリアやスロヴァキア、ハンガリーを経て黒海に流れる国際河川である。

2. ダム建設反対運動

ハンガリーとスロヴァキアの国境をなすドナウ川流域は、中世から起きるドナウ川の氾濫に時折悩まされてきた。1965年6月、ドナウ川を挟んだ対岸の旧チェコスロヴァキア南部の堤防が決壊し、46市町村約55,000人が避難する大洪水に見舞われた。両国にとってのドナウ川治水対策は、国家の大きな課題だった。そこで、1977年9月、「ガプチコヴォ＝ナジマロシュ水利施設システムの建設と運転に関する条約」を両国は締結した。上流のチェコスロヴァキアで「ガプチコヴォ・ダム」を、下流のハンガリーでは「ナジマロシュ・ダム」を共同で建設し、72万kwhと16万kwhの水力発電所をそれぞれが建設する計画だった。

この計画は、ドナウ川の流れを大きく変えるだけでなく、「ガプチコヴォ・ダム」上流に第一ダムを建設し、そこに浜名湖ほどの面積をもつ巨大なダム湖を造成し、電力需要のピーク時には大量の水を放水して発電するというものだった。

大量放水によって支流の水は逆流し水面の上昇が起き、広範囲にわたる河畔林や周辺の森林が破壊されるなど、生態系への悪影

響は甚だしい。さらに汚染されたダム湖の水が地下浸透して地下水を汚染し、飲料水の供給に支障を来すと考えられた。多くの国民が反対する理由はむしろ地下水への環境汚染、すなわち安心・安全が脅かされることへの強い懸念が反対運動の源にあった。



ドナウ川本流に計画された「ガブチコヴォ・ダム」と「ナジマロシュ・ダム」。真下（1990）*より引用。

ダム建設により河川生態系や周辺農村の生態系が破壊されるとして、強い反対を表明していた同国の生物学者でジャーナリストのヴァルガ・ヤーノシュらは、1984年1月に非合法の環境NGO「ドナウ・サークル」を結成し、ダム建設の反対運動を展開した。この「サークル」は、1985年、「ナジマロシュ・ダム」建設に関する環境影響評価調査書を出版し、翌年1月には首都ブダペストで社会主義国の民間団体としては前例のない公開記者会見を実施した。そして数週間後に「サークル」のデモ行進の予定を発表すると、ハンガリー政府はヤーノシュらを警察へ出頭させ圧力をかけた。だがデモの直前に事態は急展開した。ハンガリー議会は「ナジマロシュ・ダム」建設と「ドナウ・サークル」の行動などについて審議を始めた。これは、ダム建設に関わる是非を問い、環境保護団体の活動について再評価を与えたことを意味する。

さまざまな経緯をへて1989年5月13日、「ナジマロシュ・ダム」の建設は中止となり、7月20日には「ガブチコヴォ・ダム」のハンガリー側工事も中止となった。

その後、政権交代を果たした改革派のハンガリー政府は、オーストリアとの国境に設置していた鉄条網を撤去し、「汎ヨーロッパパニック」と称して集まった東ドイツ市民の逃亡計画に協力した。またチェコスロヴァキアも東ドイツ市民に対してビザなし旅行を認めた。そして1989年11月9日、東ドイツ政府中央委員会は「東西ベルリンの国境を即刻開放する」と発表した。これによって、「ベルリンの壁」は事実上崩壊し、翌年10月3日には東西ドイツの統一が実現することとなった。

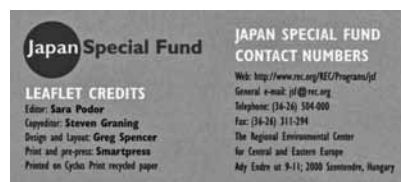
以上は、ブダペストのセンテンドレに本部があり、中東欧地域で最も大きな環境保護財団・中東欧地域環境センター〈The Regional Environmental Center for Central and Eastern Europe (REC)〉のMagdolna Toth Nagy 上席専門家から聞き取りした内容と既存資料からまとめたものである。

このRECは、既述した「ドナウ・サークル」の活動の延長線上で1993年に創設された非営利・非政府組織である。この組織の主な目的は、中東欧の環境保護団体に対する助成プログラムや自治体向けサポートプログラム、情報提供サービスのほか個人活動家に対する支援もおこなう。



ブダペストにある中東欧地域環境センター（REC）

日本政府はRECの創設当初から「Japan Special Fund (JSF)」のサポートシステムを始めた。ハンガリー（1993-95年）とポーランド（1995-96年）へはそれぞれの河川環境の保全プログラムに、スロヴァキア（1996-97年）へは土壌汚染修復プログラムに支援サポートをおこなった。日本政府は2007年までの15年間にJSFを通して既に1,200万米ドルを支援している。



RECが発行した「Japan Special Fund」のリーフレットの奥付。

3. チェコ環境政策

プラハにあるRECチェコ支部で、Daniel Kahuda氏とFilip Cejka氏の二人のプロジェクトマネージャーに、チェコ政府の環境政策についてインタビューした。二人とも修士の学位を有した20代後半の若手研究者で、水文学を専門とするKahuda氏はボスニア・ヘルツェゴビナで水環境の保全プログラムを展開し、Cejka氏は土壌化学が専門で、国内でさまざまなプロジェクトを展開しているという。

近年、中東欧では洪水や大雨が頻発しているが、これも地球温暖化の現象と考える。EUでは気候変動対策として風力発電と太陽光発電を推進しているが、数年前からバイオガス発電の利用拡大も



RECチェコ支部のKahuda氏(左)とCejka氏。

図っている。原子力発電は前向きに検討している。

チェコ政府としても環境ビジネスに支援を始めている。しかし地方政府は、企業からの支援申請は厳しくチェックしている。バイオマスビジネスはEU全体で支援を始めている。

農業や酪農についての環境教育プログラムを大学と共同で実施している。また、環境保護の人材育成もおこなっている。自治体関係者への環境教育も実践しているという内容だった。

* 真下俊樹（1990）「ガブチコヴォ＝ナジマロシュ・ダム」『シリーズ東欧革命①チェコスロバキア、東欧のエコロジー』緑風出版。

現代社会と天理教(1)

地雷 虐待 格差社会
DV 孤独死 戦争 貧困 自殺 温暖化 南北問題 核兵器 CO2 新型インフルエンザ 環境破壊
家庭の崩壊

天理大学 おやさと研究所 平成22年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもたらしています。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づき生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思います。

第1講 4月25日(日)
井上昭夫 「谷底せりあげ」とユートピア

アフガン・アフリカでの「谷底」せり上げの実体験を映像を通して語ります。ユートピアの「高山」を極めた共産・資本主義もいまや地獄相に喘いでいます。そこで現代宗教のユートピアの有無とその行く末を予測してみたいと思います。

第2講 5月25日(火)
澤井義則 道に道あり

「ちばも鏡なら、世も鏡」。今、私たちは、どのような姿を「世上の鏡」に映し出していく必要があるかについて考えてみます。

第3講 6月25日(金)
堀内みどり 白紙に戻って一より始める

男女共同参画という理念の実現を目指している現代社会で、天理教婦人会設立百年を迎えることの意味を考えてみます。

第4講 8月25日(水)
岡田正彦 情報化社会と「たすけ合い」

ポスト・モダン、後期資本主義、情報化社会などと呼ばれる新たな社会状況のもとで、これから求められる「宗教」のあり方を模索しながら、天理教の教えに基づく人間の生き方の意義について考えていきたいと思います。

第5講 9月25日(土)
幡鎌一弘 教えの足もとを照らす

温故知新。先人たちは、常に「現代社会」と向き合ってきました。向き合いつつ、教えを磨いていたのです。歴史を振り返ることで、私たちの今を考えます。

第6講 10月25日(月)
澤井義次 生かされて生きる一生の意味論—

中高年層の自殺の増加など、現代社会が抱える諸問題も射程に入れながら、筆者がこれまで探究してきた「生の意味論」を理論的に展開し、現代社会における天理教の教えに基づく人間学の視座を提示したいと考えています。

第7講 11月25日(木)
宮田 元 陽気ぐらしの世界をめざして

いろいろな問題が起こっている中で、現代社会は大きな変化を見せつつあります。このような現代において、「元の理」をてがかりとし、常に変わらぬ教えを広く深く掘り下げつつ、あらためて私たちの生き方を探ります。

場所：天理教道友社6階ホール(予定)

時間：13:00~14:45

* お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理
第11巻 第3号 (通巻123号)

2010(平成22)年3月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭夫
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan